

(3) 社会の変化を見据えて

私たちは、大きく社会が変わろうとしていることを強く感じる事象があります。例えば、人口減少や高齢化、インフラの劣化、都市への集中、山地や農地の放棄などです。このようなことが今後ますます進行することで、国土を安全に維持するためには莫大な費用を要することは明白で、実際に行き詰ることは見えています。

地球の表層の大地で暮らすには、そこが安全で安定していることが基本なのは当然ですが、そのようなところをこの日本列島で見つけることはむずかしいと思います。かといって、簡単に海外や宇宙へ移動するというのもかないません。それは、自然の恵みによって生かされていることを身をもって知っているからです。そうすると、何とか安全な行為で安心して暮らすすべを見つけていく必要があります。少なくとも本来の姿に負荷を掛けないように、一時の負荷も回復できる程度とすること、自然の機能が健全に循環できるようにその機能をうまく活用できるような知恵や工夫が求められているということです。つまり、自然のシステムに抗する行為はいずれは負のものになって帰ってくるということになります。典型は地球の温暖化がありますが、いまやそれを疑う人はいないほど、さまざまな現象に発現していますし、実際の観測や計測結果からも裏付けられています。これが厄介なのは、一瞬のことではなく長期間の積み重ねで起きているということであり、初期の状態に漸近させるのもそれ以上の時間と暮らし方の大胆な変革が必要になるという重症のはじまりに見えます。

それには、国連が提唱している SDGs といったものや日本の経団連が提言される「ともに想像する未来 society5.0」様なものを具現化するというのも切り口としてよいと思われます。そのためには、市町村単位ぐらいの規模をモデルにして、集中的にコストと人材を投入して実践プログラムを実践していく。もちろん修正することがあつて、応用できるものはどんどん他地域に一部でも移植して再生を図ることをしていくことが必要だと思います。大胆な構想と投資をすることが重要な要素で、そうしないと都市に勝る魅力的な地方の創生は不可能であり、これまで繰り返されてきた総論賛成各論反対を無為に続けることになります。そして、実施する中では常に分析、評価して修正改善するというこれまでとは異なる意識への転換が必要になります。投資には、より公益性の高いものにするためにあらゆる人材を投入して国策として取り組むことが必要です。そして、これが次世代へつなぐ遺産ともなりうるのではないかと思われるし、これぐらいの発想の転換が支持されないようでは未来はないと思っています。そういう中での切り口として、必然である自然災害を切り口にして、国土を守

る、これまでの文化や風土を維持継続させることも可能となると思います。これまでの100年を振り返り、そのまま延伸するのか、一度振り返って新たな道を構築するのかの分岐点にいるということになりますが、成り行きで先に行ってしまうと、もはや戻ることは至難であるということだけは確実なことです。

自然を対象にしてきた研究者や技術者は、自然と共生するということとはどんなことなのか、どういう意味があるのか、次世代へ何が残せるのかということを示唆し、具体的な提言を示すべきだと思います。